

ギヤスケルとディケンズ——郵政改革前後の手紙と犯罪

松岡 光治

Mary Barton (1848) の年老いた Alice Wilson がまだ若い頃、同じマンチェスター在住の兄 George が湖水地方の実家に住む母親の死を手紙で知らされ、すぐに馬車で出発したことがあったが、到着時に埋葬はすっかり終わっていた。手紙の輸送に鉄道が利用される前の時代で、「郵便配達は今とは違っていた」(5: 33) から、知らせの手紙が途中で滞っていたのだ。My Lady Ludlow (1858) の年老いた語り手も、自分の子供時代と当節の郵便事情の落差について作品冒頭で詳述している。1840 年代に投資・建設ラッシュとなった鉄道によって、それまで「6 人乗りの馬車で 2 日かかっていた旅」の所要時間が 2 時間に短縮され、鉄道網の発達で迅速かつ大量に運ばれるようになった郵便物は、「週 3 回（スコットランドの田舎では月 1 回）しかなかった配達が毎日 2 回」(3: 145) になった。しかし、送られてくる回数が増えれば、「本のように熟読玩味されていた」昔の手紙とは違い、「素っ気ない、ぎくしゃくした短信」が多くなり、人と人とのつながりを促進するはずの現代社会の SNS と同じように、取り返しがいけない様々な誤解によって人間の心の絆も切れやすくなる。Cranford (1851-53) の語り手 Mary Smith が、インドで行方不明になった Peter Jenkyns とおぼしき人物に宛てた手紙を出す際に、以下に述べる郵政改革で導入されて間もない郵便ポストに入れた瞬間に抱く「過去の人生同様に取り返しがいけない」(2: 275) という不安は、手紙が人から人へ途切れることなく手渡されていた時代にはなかった感覚であろう。

鉄道の発達とともにヴィクトリア朝初期の郵便事情を激変させたのが、「近代郵便制度の父」と呼ばれる Rowland Hill による 1840 年の郵政改革、とりわけ半オンスまでの郵便物はイギリス国内どこでも均一の配達料金とする 1 ペニー郵便制 (Penny Post) である。その年の 5 月には黒地に Victoria 女王の横顔が描かれた Penny Black という世界初の郵便切手も発売された。この改革の目的は遠く離れた肉親や親友とのコミュニケーションを促進することであったが、その弊害として商品の宣伝や金品の搾取といった目的で多量の手紙が無差別に送られることになった。事実、ロンドンの郵便局が配達した手紙は、導入前に

は週 160 万通だったのに、導入後の週には 320 万通へと倍増している。さらに、そのような数量の増加と、料金前納の切手（それ以前の郵便料金はほとんど受け取る側が払い、先払いは相手への社会的侮蔑と考えられた）や柱状郵便ポスト (pillar box) の普及によって郵便局員との接触がなくなったことで、差出人の匿名性が一気に高まった。これは産業革命とともに人口が急増して巨大化した近代都市社会で担保された個人の匿名性と通底している。

本稿では、時代背景が郵政改革以前と以後に設定された Gaskell と Dickens の作品を取り上げ、プロットの仕掛けとしての手紙と犯罪、特に脅迫 (blackmail) の問題に焦点を定め、手紙に書かれた秘密を暴露するぞという脅迫と、脅迫のツールとしての手紙の悪用・乱用について考察する。手紙と犯罪の問題は愛情と金銭が動機となることが多いものの、鉄道や郵便の発達による急激な社会変化がもたらした心理的な問題も絡んでいるので、一緒に分析することで両作家の類似点と相違点を明らかにしたい。

1. 秘密の手紙に関する脅迫

Wives and Daughters (1864-66) の舞台は、作品冒頭に「45 年前の田舎町」や 1832 年の「選挙法改正法案の可決前」(10: 4) という言及があるので、1820 年代と思われるが、連載当時の読者にとって興味深いことに、¹ 1860 年代から流行したセンセーション・ノヴェルの要素として、この小説には主人公 Molly Gibson を巻き込む二つの大きな情事の秘密がある。一つは彼女が預けられた地主の Hamley 家の長男 Osborne に身分の低いフランス人の妻と息子がいたという秘密、もう一つは彼女の父親の再婚相手 Kirkpatrick 夫人の娘、Cynthia が 16 歳の時にドレスの代金 20 ポンドを Cumnor 伯爵家の土地管理人 Preston から借りる担保として、20 歳で結婚すると約束していたという秘密である。後者の秘密は、Cynthia が Preston に書いて送った 7 通の手紙という形で相手に握られており、その手紙の証拠によって彼女は脅迫され、結婚を迫られている。

Molly は Cynthia の秘密の手紙を取り戻すべく、Preston が大人の女性ではなく「少女が書いた手紙」(10: 390) を使って結婚を迫ること、そして手紙を振りかざして「脅迫の手段として」使うことが、「紳士として」あるまじき行為である点を指摘することで成功を収める。そうした彼女の指摘と成功は現代の読者には説得力に欠けるように思えるが、当時の読者にとってはそうでもなかった。² この作品で Gaskell が提示した有産階級の価値観によれば、Preston の

ように「ハンサムであることを自覚している」(10: 123) 人間は往々にして道徳性に問題がある。従って、人間の外面と内面は乖離するという価値観が支配的な階級において、Preston のような男は紳士としての世間体 (respectability) を誰よりも気にかけなければならない。伝統的に、紳士像の形成には騎士道の必要条件として武勇 (prowess) や勇気だけでなく、淑女への献身やその保護も求められたので、Cumnor 伯爵家にとって「獣性を秘めた、雑菌のような人間とも言える下層階級の他者」(d'Arbertis 145) でありながら、「上流社会の出入りを許されるほど優れた体育活動で名を馳せた」(10: 123) この土地管理人は、弱い女性を脅迫したという自分の行為が「紳士や、立派な人や、男らしい人であれば、我慢できないこと」として見なされるのを恐れているのだ。

He felt at once that he should not dare [to refuse Lord Cumnor]; that, clever land-agent as he was, and high up in the earl's favour on that account, yet that the conduct of which he had been guilty about these letters, and the threats which he had held out about them, were just what no gentleman, no honourable man, no manly man, could put up with in any one about him. (10: 392)

ここで看過できない点は Molly もまた Preston を脅していることである。彼女は彼の所業を、Lady Harriet Cumnor を通して、その父親で彼の雇い主でもある Lord Cumnor に伝えてもらおうと脅しているのだ。これは「脅迫には脅迫を」という旧約聖書的な同害報復の形をとっているものの、実際には、相手の男性に雇い主を「はねつける勇気がない」ことを見越した女性の側にむしろ、現実問題に対応できる「勇気」があるというジェンダーの問題にすり替えられている。

Gaskell 作品では貧困のせいで死ぬ登場人物は枚挙にいとまがないのに対し、犯罪の報いとして死ぬ人物は非常に少ない。Dickens の場合は、遺書を隠匿した Clennam 夫人を脅迫する悪党 Rigaud が家の崩壊で圧死する *Little Dorrit* (1855-57) でも、学校教師による殺人の現場を目撃して脅迫する悪漢 Riderhood が溺死する *Our Mutual Friend* (1864-65) でも、良心のない悪人の脅迫は因果応報で処罰されるが、そうした完全な悪人は Gaskell の場合は数えるほどしかない。キリストの死と復活による罪の赦しが基盤となる英国伝統のユーモアに富む *Wives and Daughters* にも完全な悪人は登場しない。秘密の手紙を脅迫の手段として悪用した Preston は、Molly の勇気や凄味に圧倒された結果であるにせよ、

紳士らしさの欠如を自覚して手を引いている。こうした脅迫者にも多少は罪悪感があることを暗示することで、Gaskell は彼の罪を赦して不問に付しているのだ。Dickens 作品でも、*A Christmas Carol* (1843) の Scrooge のように時代精神や社会風潮の影響で良心を抑圧していた人物は、最終的に罪を悔いて赦される。だが、赦されるだけでは済まず、生まれ変わって善人にさえなってしまう。善悪の間で揺れる人間の魂の葛藤 (psychomachia) が描かれる場合でも、最後は登場人物が勧善懲悪に従って両極に分けられる。素人演劇にも熱中した Dickens はそうしたメロドラマの要素を作品に注入せずにはおれないのである。

2. 金銭授与を伴う手紙による脅迫

Ruth (1853) の時代設定は *Wives and Daughters* よりも少し後の 1830 年代後半である。お針子 Ruth が紳士階級の青年 Henry Bellingham にだまされて馬車でロンドンへ連れ去られたのが 5 月で (6: 92)、³ 二人の子供 Leonard の誕生が翌年 2 月であるから、彼女はすぐ妊娠していたことになる。7 月に二人で北ウェールズに来てから Bellingham が脳炎にかかった時、医師からの手紙で駆けつけた母親は容態を尋ねに来ただけの Ruth について息子に次のように言っている。

‘Henry, there is something I must speak to you about; an unpleasant subject, certainly, but, one which has been forced upon me by the very girl herself; you must be aware to what I refer without giving me the pain of explaining myself.’ (6: 67)

性の二重規範ダブル・スタンダードに守られた紳士という免罪符を持つ若者が労働者階級の美しい娘を誘惑し、その娘が妊娠して捨てられ、街の女に堕し、最後に投身／入水自殺することは、ヴィクトリア朝では見慣れた日常の光景であった。⁴ その点からも、Bellingham 夫人が Ruth に強要されたと偽る「不愉快なこと」とは、幼くして母を失った「無邪気で雪のように汚れのない」(6: 35) 娘には考えも及ばない——夫人が紳士階級の日常茶飯事として勝手に思い込んでしまい、リスクペクバリティゆえに口にしたくない——妊娠のように思えてならない。

Bellingham 夫人は自分の分身である息子の不始末の原因と責任をすべて Ruth に投影し、自分たちとは無縁の罪として処理しようとする。その際、夫人は旅籠を出立する前に彼女に残した短い手紙の中で、本来は息子に対して求めるべき悔い改めを彼女に強要し、堕ちた女のための更生所 (penitentiary) に入るこ

とを強く勧めるとともに、妊娠という不愉快な「ことを見事に／気前よく処理する (do the thing handsomely)」(6: 69) ために 50 ポンドの銀行券を手紙に同封している。これは罪悪感を抑圧するための自己欺瞞的な行為であり、その銀行券は自分の息子を救うために必要な免罪符の代金に他ならない。金を与えることで Ruth に悔い改めを強制しようとする Bellingham 夫人の手紙は、主たる目的が相手から金を受け取ることにある普通の脅迫状とは金の流れが逆であるものの、相手を畏怖させて目的を遂げる点では同断である。

手紙で脅迫する思考は母親から息子にも受け継がれている。誘惑後に捨てられた Ruth の前に再び姿を見せた時、彼は名前を Donne に変えていた。この名前の皮肉な暗示として、Jenny Uglow は男女関係の「終わり (concluded, finished)」(332) を指摘しているが、下院議員の候補者として重要なリスペクタビリティを考えるならば、「社会的容認 (socially acceptable)」(COD) を読み取ることも可能だろう。Bellingham が Ruth との復縁を求めるのは彼女の身体的な美しさに Bradshaw 家のガヴァネスという見苦しくない社会的な地位が備わったから、そして自分たちの息子の存在を知って引き取りたい気になるのは下院議員にとって世間体の脅威となる私生児をなんとかしたいから、と解釈できないこともない。いずれにせよ、彼がエクレストンの郵便局留めで Ruth に送った匿名の手紙は、「坊やの幸せは君が要請に応じるか否かにかかっている」(6: 216) と書かれている点で、まさに脅迫状の名で呼ばれるべきものである。

Bellingham の脅迫癖は、母の弱みに付け込んだ「(息子の) 教育費に糸目はつけない」(6: 219) という提案にも見られるが、それは Bellingham 夫人の金銭授与による脅迫とは似て非なるものである。なぜならば、「ぼくの一言がエクレストンの善良な人々に真実を悟らせる (undeceive) ことになる」(6: 221) という秘密暴露の脅迫は、常に Ruth をだます癖がある彼の卑劣さを浮き彫りにするからだ。とはいえ、この性悪な男がチフスに感染しても死ぬことはない。作者は、彼の看護と救命の代償としての Ruth 自身の死を通して、十字架上のイエスの贖いの愛を読者に想起させたかったのであろうが、*Wives and Daughters* の Preston の場合のように、ここでも Bellingham の罪は不問に付されている。川で溺れかかった子供の命を救うという Bellingham の自己犠牲的な行為が第 2 章で描かれているのは、Ruth に彼を英雄視させるためだけではない。それは同時に彼の罪を最終的に不問に処す、つまり赦すようにするための伏線だったのであるまいか。イエスが「無慈悲な負債人のたとえ話」(Matt. 18: 21-35)

で力説した真理に従い、Gaskell は Ruth のように自分の罪の赦しを神に願うことが他人を赦すことと密接に関係していることを示そうとしているのである。

Dickens は堕ちた女を特別施設 (Urania Cottage) に隔離したり、*David Copperfield* (1849-50) で海外移住させたりしたが、Gaskell は Ruth を Bellingham 夫人が推薦した更生所に隔離するのではなく、非国教徒の牧師 Thurstan Benson の自宅で更生させている。Thurstan は Ruth を堕ちた女の汚名から守るために姉 Faith と一緒に嘘をつくが、その罪が神に赦されるのは「主イエスであればなされたように」(6: 89) 彼が Ruth の罪を赦しているからである。Dickens の作品にも罪と赦しの場面は多いが、赦す側はほとんど罪惡とは無縁の天使のような善人——罪を犯されたと思っていないので赦す必要性を感じない人々である。*Dombey and Son* (1846-48) のヒロイン Florence などは、自分を追い出した父親に求められる前から赦しを与え、逆に、家を出た自分自身の罪の赦しを乞うている。これは赦しを求めることも与えることもしない父親の高慢さという罪への皮肉であるが、同時に、神が裁くためでなく救うために遣わしたイエスの無償の愛をヒロインに体现させずにおれない Dickens の性格を雄弁に語っている。

3. 雨あられと降って来る手紙

オックスフォード大学出版局の書簡集で 12 巻に及ぶほど膨大な数の手紙を家族や友人・知人に書き送っていた Dickens の作品には、手紙がプロットの展開において重要な役割を果たすものが少なくない。とりわけ作品の構成やテーマと深く関わっているのが *Bleak House* (1852-53) である。この小説の題名に使われた「荒涼館」は 1851 年に開催されたロンドン万博の水晶宮のパロディー、そして物質的繁栄とともに様々な問題を抱えていた当時の英国社会の縮図として捉えることができる。そのような出版前の社会問題や時事問題の一つとして、郵政改革に付随する弊害としての手紙の悪用・乱用がある。

アフリカ大陸での「望遠鏡的博愛 (Telescopic Philanthropy)」(44) に熱中し、身辺の家事や育児には全く無関心な Jellyby 夫人は、個人や団体との通信のために長女 Caddy を無給の書記 (unpaid amanuensis) として使い、大量の手紙を口述筆記させている。「たった 1 日でアフリカ関係の手紙を 150 通から 200 通も受け取り、一つの郵便局から一度に 5,000 通もの案内状 (circulars) を送った」(51) こともある。また、彼女を含めた多くの自称・博愛主義者たちが、準男爵

Sir Leicester Dedlock に寄付金を求める手紙をたくさん書き送っている。こうしたことが可能になったのは言うまでもなく 1 ペニー郵便制のおかげである。

この小説のヒロイン Esther Summerson は Sir Leicester の奥方 Lady Dedlock が結婚前に Captain Hawdon との間に儲けた私生児であるが、この父が書いた過去の恋文が母の道徳的な罪の証となり、その手紙を入手した Dedlock 家の顧問弁護士 Tulkinghorn の脅迫を招いている。ただし、彼の脅迫の目的は金や性の強要ではなく、Lady Dedlock に対して生殺与奪の権を握ることにある。それは、美と富によって「成り上がった彼女 (floated her upward)」(19) が、勤勉な中産階級の男性にとっては屈辱的な上流階級の「軽視と無礼 (slights and offenses)」(423) を体現している点で、複雑な階級意識から生じた脅迫だと言える。この顧問弁護士に結婚前の Sir Leicester は全幅の信頼を寄せ、何よりもプライオリティを置いていたが、そうした関係は（たとえ主従関係であったにせよ）男性のホモソーシャルな関係への Tulkinghorn の欲望を満たしていたと考えられる。

家父長制社会に特有のホモソーシャルな関係を重視する Tulkinghorn は、Lady Dedlock やフランス人女中の Hortense に関して「女は地球のあらゆる所で迷惑をかけるようにできている」(613) と述べている点からも、男同士の絆を最優先する女嫌いだと言ってよい。男性の知り合いについて「不幸の 4 分の 3 の原因は結婚にある」(609) と断じる Tulkinghorn は、Sir Leicester に独身のまま自分の腹心の友でいてほしいと思っていたはずだが、主人の結婚によって彼の優先順位は Lady Dedlock よりも下位になってしまった。J. Hillis Miller は、Tulkinghorn が奥方の過去の秘密を知っても、その利用も暴露もできないことから、知ること＝支配することの不首尾を読み取っている (173)。だが、奥方の秘密の手紙を握ったとはいえ、それを明るみに出してしまうと、Tulkinghorn が「考慮すべき唯一のもの」、つまり彼女を溺愛する Sir Leicester の「感情と面目、そして一族の名声」(610) が崩壊し、男性のホモソーシャルな関係に基づく自分自身の存在意義も失われてしまう。従って、奥方の秘密の手紙を使って彼女に物理的な脅迫をするのではなく、従来どおりの生活を続けさせながら彼女を支配できる精神的な脅迫を実践しているのだ。それは彼女が過去の不謹慎な行為を自分から明かさないようにするための脅迫である。脅迫は、秘密を公表されたくない心理状態にある人間に対しては功を奏するが、実際に明るみに出してしまうと、Gaskell の “Right at Last”(1858) で召使に秘密を握られて手紙

で脅迫された夫に代わって妻が返事の手紙で脅迫を退ける時 (3: 105) のように、その効力は無に帰し、秘密を公表した脅迫者は何の利益も得られない。

Tulkinghorn は金持ちや権力者に対する支配欲が強い反面、利用して捨てることのできる人間には関心を払わない。嫉妬深い言動によって解雇された女中 Hortense の恨みを買って殺されるのはそのためだ。Hortense は Tulkinghorn による Lady Dedlock の秘密に関する調査を手伝うが、見返りがなかったことで激怒のあまり彼を殺害し、⁵ その嫌疑が自分を解雇した奥方にかかるようにする。具体的には、Dedlock 家の女中頭 Rouncewell 夫人と Bucket 警部にそれぞれ匿名の手紙を出すのだが、前者は死体発見の新聞記事を貼って殺人犯の名前を書いた手紙 (787) で、後者は Lady Dedlock を真犯人に仕立てて Sir Leicester と警部の家に続々と届くように乱用された手紙である。

‘... Now, open that pocket-book of mine, Sir Leicester Dedlock, ... and look at the letters sent to me, each with the two words, LADY DEDLOCK, in it. Open the one directed to yourself, which I stopped this very morning, and read the three words, LADY DEDLOCK MURDERESS, in it. These letters have been falling about like a shower of lady-birds. ...’ (771)

ここでの注目点は Bucket 警部が「テントウムシのような手紙が雨あられと降って来る」と述べていることだ。⁶ こうした比喩は現代の読者には違和感があるだろうが、当時の手紙は今の定型と違ってカラフルで小さい自家製のものが多く、⁷ 表には 1 ペニー郵便制で発行された Penny Black が貼られ、裏には封印として赤い封蝋が頻用された（ただし、1841 年には Penny Black が Penny Red に、消印が赤褐色から黒へ変更された）ことから、赤黒模様のテントウムシは当時の読者にとって手紙と容易に結び付くイメージであった。

Bucket 警部が自分の家の下宿人 Hortense を真犯人として突き止めることができたのは、Lady Dedlock に対する讒言の手紙を書いてポストに投函する彼女の姿が、その監視を頼まれた警部の妻によって何度も確認されていたからである。この種の犯罪が、解雇された労働者階級の貧しい女中でさえ、1 ペニー郵便制の恩恵を受けて、郵便局で顔を見られることなく、切手を貼った手紙を郵便ポストに投函できるようになった郵政改革の弊害であることは間違いない。

4. 郵政改革の功罪

郵政改革によってテントウムシのように雨あられと降って来たのは手紙だけではない。匿名で出されていたヴァレンタイン・カードもまたそうだ。⁸ このカードは、1 ペニー郵便制がヴィクトリア朝の人々に男女関係で装う必要のある慎み深さ (prudery) を保証してくれた切手貼付によるポスト投函とその匿名性のおかげで爆発的に流行し、1841 年にはイングランドで約 40 万通、30 年後の 1871 年にはロンドン中央郵便局だけで、その数の 3 倍が取り扱われた。この中央郵便局について、Dickens は *Household Words* 創刊号 (March 30, 1850) で Gaskell の短篇 “Lizzie Leigh” に続けて、Rowland Hill の友人でもあった編集助手 W. H. Wills との共同執筆で “Valentine’s Day at the Post Office” を掲載している。この記事では郵送される新聞の最終収集時間 (夕方 6 時) 直前の混雑ぶりが活写されているが、同じ場所・同じ時刻の人込みを描いた絵画としては、G. E. Hicks の *The General Post Office at One Minute to Six* (1860) が有名だ。最後の収集時間に間に合うように貧乏人を含めた様々な階級の人間がひしめく状況は、郵政改革が階級を均一化したことを示唆するとともに、ごった返す中で同じ窓口の方向を見ている人々に周囲とのコミュニケーションがない点では、産業革命で大都市に流入した近代人の孤立感や疎外感を暗示している。

画期的な発明品や考案物には必ず功罪がある。社会問題化する様々な弊害の共通点としては、人間の生活に快適さと便利さを与える反面、恩恵に浴せない人間を周縁化することで、従来の社会格差をむしろ広げてしまうことが挙げられる。*Bleak House* の浮浪児 Jo は「人々が読み書きし、郵便集配人が手紙を配達するのを見ても、その言葉が少しも分からない」(236) ので、郵政改革の恩恵を受けることなく、社会システムの埒外に追いやられてしまう。William Turner は、*Rain, Steam and Speed: The Great Western Railway* (1844) において、雨の中で蒸気を上げながらテムズ河の橋を猛スピードで疾走する機関車に産業革命による近代化を象徴させたが、浮浪児の Jo は機関車の前を必死に横切ろうとする (恩恵に浴している人間には見落とされてしまう) 小さな野ウサギに似ている。*Cranford* では、この野ウサギのように線路を渡っていた女の子の救出時に退役軍人 Brown 大尉が轢死するが、彼は時代のブームに乗った鉄道に勤務していただけでなく、売り出し中の Dickens の新刊を愛読してもいたので、Gaskell は前世紀の Johnson 博士の大げさな文体を真似て「手紙を書くこと (Epistolary writing)」(2: 172) が得意な Deborah Jenkyns をむしろ鉄道事故で死な

せるべきだったかもしれない。Dickens の *Little Dorrit* では、イギリスの最新の郵便事情を知らない外国人 John Baptist Cavaletto が、ロンドンの街中を暴走する郵便馬車に轢かれて大怪我をするが、事故を見ていた老人は「起訴して罰金に処してやらんといかん、郵便馬車の奴らは！」(137) と憤っている。このような事故が不問に付されて弱者が泣き寝入りを強いられていることについて、Dickens は政府の責任が問われない（作品の原題でもある）“Nobody’s Fault” というテーマと関連づけている。この小説では社会が牢獄のイメージで捉えられているが、鉄道が産業発展とその破壊力の象徴となっている *Dombey and Son* 以降、Dickens の悲観的な社会観は様々なイメージや象徴で示されるようになる。

それに対して Gaskell の場合、楽観的な自由放任主義^{レッセ・フー}から生まれた「イングランドの現状問題」に対して提示される解決策は、同じ楽観主義に基づくキリスト教的干渉主義や父親的温情主義である。彼女は、科学やテクノロジーの発達のみならず郵政改革についても、基本的には未来志向の楽観主義者だったと言ってよい。本稿の冒頭で言及した *Cranford* の語り手 Mary Smith は導入された直後の郵便ポストに不安を覚えたにもかかわらず、Peter Jenkins の母親が出しても届かなかった過去の古い手紙を受け継ぎ、新たに書き直した手紙を送って彼をインドから帰国させることによって、郵政改革以前の郵便システムの不備（誤送や遅配）がもたらした肉親関係の断絶を修復している。女装の罪で家父長制の典型的な父親に打擲されて家出した息子と残された肉親の姉 Matty との絆を（Tulkinghorn が Sir Leicester と維持しようとした絆とは逆の）女同士の絆として郵政改革後に再び結んでいるのだ。「紐 (string)」の収集が Mary Smith の「大好きなこと (weakness)」＝「奇矯な趣味 (foible)」(2: 200) で、「輪ゴム (Indian-rubber ring)」が「大切な宝物」だという些細な表現に意味を見出す読者であれば、Gaskell が彼女に遠隔地の肉親や親友との絆の維持・強化を目的とした郵政改革の功績を体現させている点で、その奇矯な趣味が決して「性格上の弱み (foible)」ではなく、実は大きな強み^{フュー}であったことに気づくだろう。⁹

注

1 この小説には 1838 年開通の「バーミンガム・ロンドン間の新路線」(10: 493) への言及もあるが、そのような矛盾した時代設定は、Edgar Wright が指摘するように、読者が今いるのは科学技術の時代なのだという Gaskell の伝えたいことに比べると、（特に小説世界では）それほど重要ではない (195)。

- 2 現代の読者にとっても説得力を持つとすれば、それは Coral Lansbury が述べているように、何が正しいかを Molly 自身に認識させ、道徳的な判断や指摘を (Gaskell の初期作品に見られるような) 語り手の介入による声ではなく、登場人物自身の会話を通して行なっているからである (204-05)。
- 3 「彼は馬車に乗るとウェールズに向かった」(93) と Felicia Bonaparte は述べているが、この勘違いはギaskell が自分の新婚旅行先のウェールズを Ruth の「最初の性体験の場所」として選んだという邪推から生まれたものだ。「The Well of Pen-Morfa」(1850)をはじめ、確かに「ウェールズを舞台にした小説では多くの女性が身を持ち崩す」(94) が、それは彼女が指摘するように “Welsh” が “wild” と類義語であるからではない。“Welsh” の語源はドイツ語の “welsch [foreign]” である。当時のイングランドの紳士階級から見れば、ウェールズは強奪を正当化される異国の他者であり、Ruth は Bellingham による強奪が正当化されるような周縁化された他者の身体にすぎない。
- 4 例えば、G. F. Watts の *Found Dead* (c. 1850) は投身自殺の名所であったウォーター橋の下に打ち上げられた堕ちた女を、Augustus Egg の連作 *Past and Present* (1858) の第 3 図はテムズ河畔のアーチの下で赤ん坊を抱えた入水自殺直前の堕ちた女を物語風に描いている。
- 5 *Cousin Phillis* (1863-64) にも 1 ペニー郵便制への言及があり、「雨あられ」としては「川の流れ (the never-ending stream of notes and letters which seem now to flow in upon most households)」(4: 434) のイメージが使用されている。ただし、その恩恵を作品の舞台である「人里離れた地域」は受けておらず、カナダに赴任した鉄道技師 Holdsworth の結婚予定を知らせる手紙が語り手 Paul Manning に届いた時には結婚式はすでに済んでおり、それを知った従妹の Phillis はショックで病気になる。Dickens は *Bleak House* で Esther が浮浪児 Jo から感染する天然痘で社会の病弊 (social malady) を象徴させたが、Phillis の病気もまた最新の交通網や通信網が田舎にもたらす弊害の象徴として解釈することができる。
- 6 Jeremy Tambling は、Hortense が奥方から解雇されたあと Esther に雇ってもらおうとした点に着目し、彼女が奥方の過去の秘密に対する二人の抑圧願望を代理で無意志的に行動化したものとして Tulkinghorn 殺害を捉えている (96)。
- 7 郵政改革前の料金は距離や便箋の枚数で決まっていたので、枚数に換算される封筒はあまり使用されず、多くの手紙は便箋を折りたたんで (通例は赤い) 封蝋をしてから郵送されていた。「古い手紙」と題された *Cranford* の第 5 章に

「封筒が最初に流行し始めた時」(2: 200) への言及があるが、これは重さで料金が決まった郵政改革後のことである。Penny Black と同時に(封筒のデザインを手がけたアイルランドの画家の名に因んで) Mulready と呼ばれる封筒兼用便箋も発売されたが、やがて封筒に切手を貼る形式の手紙が主流となった。

8 ヴァレンタイン・カードに Mary Barton は Job Leigh が朗読した Samuel Bamford の短詩を書き写す(5: 97) が、その一部は彼女の父が殺人を犯す時に銃の詰め物として使用される。現実生活での Gaskell は手紙をもらう子供たちと同様に「手紙を書くことが楽しみ」(LG 118) だったが、虚構の小説世界では手紙であれカードであれ、書き言葉によるコミュニケーションから生じる階級間や個人間の誤解や対立を話し言葉による直接の対話で是正させることが多い。

9 語句をその通常の意味の反対に用いる修辞法 (antiphrasis) の例は *Wives and Daughters* の冒頭にもある。Cumnor 伯爵はぶらぶらと小作人たちの所に行って世間話をする習慣があるが、そのように「土地管理人と小作人たちの間へ個人的に介入するという欠点 (failing)」(10: 5) は、キリスト教的干渉主義の重要性を説く Gaskell にとっては美点の謂いに他ならない。

引用文献

Bonaparte, Felicia. *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon*. U of Virginia P, 1992.

Chapple, John A. V., and Arthur Pollard, editors. *The Letters of Mrs Gaskell*. 1966; Manchester UP-Mandolin, 1997. (abbr. LG)

d'Arbertis, Deirdre. *Dissenbling Fictions: Elizabeth Gaskell and the Victorian Social Text*. St. Marin's Press, 1997.

Dickens, Charles. *Bleak House*. Edited by Stephen Gill, Oxford UP, 1996.

---. *Little Dorrit*. Edited by Harvey Peter Sucksmith, Oxford UP, 1982.

Lansbury, Coral. *Elizabeth Gaskell: The Novels of Social Crisis*. Barnes & Noble Books, 1975.

Miller, J. Hillis. *Charles Dickens: The World of His Novels*. Harvard UP, 1958.

Tambling, Jeremy. *Dickens, Violence and the Modern State: Dreams of the Scaffold*. Macmillan, 1995.

Wright, Edgar. *Mrs. Gaskell: The Basis for Reassessment*. Oxford UP, 1965.

第9章「ギヤスケルとディケンズ——郵政改革前後の手紙と犯罪」（松岡光治）
日本ギヤスケル協会（編）『比較で照らすギヤスケル文学——創立 30 周年記念』（大阪教育図書、2018 年 10 月 15 日発行）113-25 頁.